

【ねがいはましては】

令和元年5月25日

KYOWA SCHOOL

第343号

「沈黙自ら護るは余甚だ之を醜む」

(ちんもくみずからまもるは、よ、はなはだこれをにくむ)

吉田松陰の言です。「黙っているのはダメだよ」という意味です。

ここで吉田松陰について簡単に 江戸時代末期、長州藩(山口県)で武士の子として生まれる。やがて20歳を待たずして藩の軍関連の仕事を担当始める。そこへアメリカペリー率いる「黒船」四隻が来港、その船の大きさに驚き、このままでは日本は外国に獲られてしまう(既にアヘン戦争の件を学んでいた)と危機感を抱き、アメリカ行き(外国の高い軍事等の技術を学ぶ)を計画、弟子の金子重之輔とともに黒船へ乗り込むがペリーに断られる。当時の江戸幕府の政策で、許可なく外国へ行くことは罪となっていたため、そのまま罪人として長州へ戻される。その獄中で「高須久子」という女性の囚人に出会う。高須久子の罪は、武家の娘でありながら身分を越えて様々な人々と交流をもったというものであった。さらに吉田松陰は、獄中にいる人々から、人それぞれに個性溢れる才能を持っていることを学んだ。その後、叔父が開いていた松下村塾で教鞭をとる。「身分に関係のない学びの場」として様々な教え子たちを排出する。その弟子の方々の一部・・・伊藤博文、山縣有朋、久坂玄瑞、高杉晋作など・・・。

やがて安政の大獄のなか、29歳の若さで江戸幕府によって処刑された。-

その松下村塾で松陰が訴えていたことばのひとつが「沈黙自ら護るは余甚だ之を醜む」です。皆、分け隔てなく言いたいことがあったら何でも語りましょう。会議の場で黙ったままでは良くないですよ、という内容です。会議とは今で言う話し合いの場のことです。学校での授業のことです。

もうひとつ、もう40年近く前の本、以前取り上げたかもしれませんが、京都大徳寺大仙院の和尚様、尾関宗園(おげきそうえん)さんの言です。今でも元気で説法を行っています。著書『死んで生きよ』より・・・

一学校や会社を訪ねて、玄関を一步入ると、もうそこでどんな問題があつて、どんなことに悩んでいるかがわかってしまうものだ。その人が机についている状態のとき、このとき机の前と体がくっついていないときは、ゴチャゴチャと不満を持っており、そのくせミーティングなどで「何か不満があつたら言ってください」と言われても必ず黙っている。ところが、あとになって、どこか隠れた場所でグズグズ言うのである。こういう活気のない人間が出てくる原因は、その場所が失敗は許さないという態度が強いからである。失敗してもいい、気楽に恥をかけるという場所では、決してそんなことはない。-(失敗が許される場所が一番いい)

このふたつのことから共通しているものがわかってきます。失敗という二文字がなく、自由に発言できること。このふたつの相乗効果で、著名な方々が多く現れていることです。

先に触れた「高須久子」・・・この方は武家の女性でありながら、身分を全く気にせず自由奔放に人々と触れ合っていたそうです。それが当時の法律に触れていたんですね。牢獄に入れられたのはそのためだという研究者がいるそうです。

吉田松陰が彼女から大きな影響を受けたのは必然だったといえるでしょう。『人にはみなそれぞれ良いところがあるものだ。だからそれを自ら発掘することのできる場所づくりをしよう。』松陰の松下村塾での学びは常に『同じ目線で』であったそうです。『私もあなたもまだまだ未熟者、お互いに学び合ひましょう。』といった姿勢です。

思ったこと感じたことがあれば、そのままを出すことができる。合つたとか間違つたとかではなく、自身がそうなのだからそのままを出す。当たり前のことなのです。それができていたからこそ、伊藤・山縣・久坂・高杉が現れました。それができていたからこそ、宗園さんの説法が今でも脈々と生きています。

成績、評価、順位、様々な方々からの苦言を気にしながらの環境は、そのすべてを取り上げてしまいます。テストがある限り、悪かったらどうしようという気持ちがつきまといまいます。生きようとはしていません。逃げたい気持ちです。順位がある限り、下がったらどうしようという気持ちがつきまといまいます。これも生きようとはしていません。結果を見せたとき、叱られたらどうしよう・・・ご家族の苦言を予想させてしまうのでは、これも生きようとはしていません。

吉田松陰さんは、ご自分の塾で小学生くらいの子どもに、歴史上の人物の生きざまをお話ししていたそうです。しかも一対一の個人授業です。松陰さんは涙を流しながらその方の物語を語っていたそうです。その懸命な姿に触れただけでも目の前の子どもは心を打たれるはず。必死なその姿に打たれると思います。『ぼくも必死に生きてみたい。そしてぼくも世の中のために、人のために生きてみたい・・・』

その気持ちの中には、他人を気にするようなものなどあるはずがありません。

高須久子さんと出会った松陰さん、黒船に乗り込んでいなかったら会うことはなかったのです。自分が思うことに正直に生きる・・・。人の目を気にせずに・・・。

出会って素晴らしいですよ。動かなければ出会いはありません。歩かなければ出会いはありません。じっとしているままじゃ、あなたの人生はあつという間におじいさん、おばあさんです。若いからぶつかれる。若いから失敗ができる。若いから立ち直ることもできます。さあ、机の前に体をくっつけましょう。生きましょう。